

敬頌新禧

皆様方のご健勝と

ご多幸をお祈り申しあげます

平成二十九年 元旦

宮城野書道会

会長 佐藤象雲
役員 一同

興亡百変すれども物は自ずから閑なり
富貴は一朝なれども名は朽ちらず
細かに物理を思いて坐に歎息す
人生安んぞ汝が寿なる如きを得ん
(蘇東坡詩・石鼓歌の一節)

雜詩其二 王維

君自故郷来

君 故郷より来る

應知故郷事

應に故郷の事を知るべし

来日綺窗前

来日 綺窓の前

寒梅著花未

寒梅 花を著けしや未だしや

あなたは私の故郷からやって来られた。
きつと故郷の様子など知っておられるでしょう。
あなたがあちらを發たれた日に、
私の妻の部屋の飾り窓のそばにある寒梅の花はもう咲いてましたか、
まだでしょうか。

《雜詩》 古くからある詩題で、作者の心境や人生観などを述べたもの。樂府的（音楽に合
わせて作られた歌詞）な内容のものが多い。
《応知》 「応」は推量の意味。おそらく知っているだろう。
《綺窓》 あや絹で張った窓。女性の部屋に用いられる。

雜詩 其一

家住孟津河 家は住まいす孟津河

門對孟津口 門は對す孟津口

常有江南舡 常に江南の舡有り

寄書家中否 書を家中に寄するや否や

わたしは孟津の河の畔に住まい、門は港の口にむかっている。
港には、いつも江南の船がもやっています。主人は家へ便りを言付けられま
したか。

雜詩 其三

已見寒梅發 已に寒梅の發くを見て

復聞啼鳥聲 復啼鳥の声を聞く

心心視春草 心心に春草を視て

畏向堦前生 畏る堦前に向かい生ゆるを

すでに寒梅は花をひらき、また鳥の囀りも聞こえてくるのに、

心は憂いて春の草を見つめ、あの人は帰らずに春の草は階段の前まで茂りはし
ないかと畏れを抱いています。

この詩は王維が雜詩三種を連作したうちの二番目の詩です。併せて掲載した連
作の他の二首は、夫の帰りを待つ妻の姿を、王維が女性に代わってそのいじら
しい情感を詠んだものと見えます。そして其二は夫、すなわち王維が故郷に残
した妻を思う心が込められているように思われます。故郷を離れて旅をしてい
る作者が同郷の人と久しぶりに会い、懐かしがって会話を交わした様子を平易
な言葉を無造作に並べているようです。しかし実際は用意周到に効果的に語句
が配置されていて、「故郷」を重複して使ってその思いを強調し、「綺窓」「寒
梅」「花」と若い妻の姿を連想させ、華やかさの中に一抹の愁いを添えていま
す。菅原道真の「こちふかば句いおこせよ梅の花 あるじなしとて春をわする
な」の歌に通じる王維の心境を感じます。

この雜詩と題される一連の詩は、夫を戦場に送った妻の気持ちを歌う辺塞詩の
ようにも見えますが、いわゆる女性の嘆きを歌った閨怨詩に分類されます。王
維は自然派詩人といわれる一方、女性のデリケートな感情を細やかに描いてい
る詩も多くあります。王維の詩は一見平凡なようで、その実は幽深であり、李
白や杜甫よりも人間体験を内に秘めているために近代的と言われます。また中
国詩人のなかで王維は圧倒的に女性に愛誦され、支持されている詩人です。

参考文献：唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・漢詩体系・王維（集英社）・中国詩人選集（岩波書店）

君故郷より来る
まさ 応に故郷の事を知るべし
らいじつ 来日
きせう 綺窓の前
寒梅花を著けしや未だしや

君日故郷未得知故郷事未日
跨窓前寒梅花著花未

《大意》 あなたは私の故郷からやって来られた。きっと故郷の様子など知っておられるでしょう。あなたがあちらを発たれた日に、私の妻の部屋の飾り窓のそばにある寒梅の花はもう咲いてましたか、まだでしょうか。
(王維詩・雑詩其二)

日新の志

日新志

謝靈運

日新志

謝靈運

《大意》 日ごとに進歩しようとする気持ち。(謝靈運)

読み
郷心新歳に切なりきょうしんしんざいにせつなり
(故里を思う気持ちは、新年を迎えて殊更に切実なものとなった。宋之問詩・新年作の一節)

郷心
新歳
切

佐藤象雲書



戈法を暢びやかに見せるため
全ての横画を右上がりにする



各部緊密にして横広がりすぎないように



第三画は字の中心に
底辺を揃える



偏は上部に
第四画は歯切れよく



編に対して旁を下げ、上下とも不揃いにする

今月の「郷」「新」などのように
隣の終画に長い縦画がある字は、
上下とも不揃いにしてバランスを
とる字が多い。
「即」「却」「郎」なども同様。



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
 - ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
 - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

春切 心新

歳切 郷心新

次号課題

隸書

真堅 春氷無

歳切 郷心新

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
初夢の					
思ひつとを思ふなりけり					

正岡 子規

和泉 溪石 先生書

資父事君曰嚴與敬
 資父事君曰嚴與敬
 資父子君曰嚴與敬

佐藤 象雲 書

音

シフジクン
エツゲンヨケイ

略解

父母に仕えるように君にも仕えよ
その心得は厳かにして敬うことである



香酒美酒を得る……

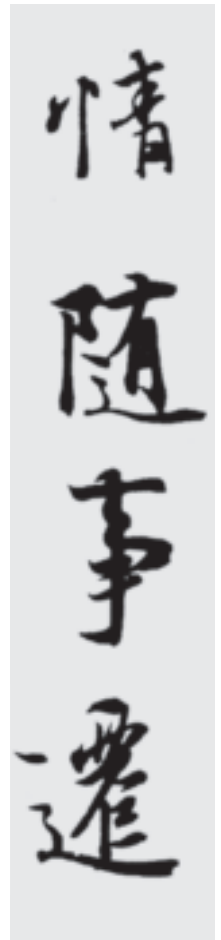
■ 史し晨しん後こう碑ひ

(後漢・西暦一六九年)の臨書 (21)

象雲臨

『得香美酒』

清時代の王澐は著書「虚舟題跋」のなかで「史晨は謹嚴、漢隸の極則。」と述べていることは以前にも触れました。青山杉雨先生は、行草書は少しくらついていた方が面白いのに対して、篆隸書は一点一画が少しでもぐらつくとひどく見にくくなると述べられています。また行草書と比較した古典文字のフォルムは非常に論理的かつ構造的で、視覚的な強さを持っている点を指摘されています。史晨碑の造形はまさに論理的で、また構造的な安定感があり強く厳しく、漢隸の極則といわれるように隸書の原理法則を備えています。今月の五文字は後碑の後半で終盤に近い部分ですが、史晨前碑や後碑の前半に比べて字がやや大きく、筆者は同じと思われていますが時を異にして書いたようです。



情は事に随いて遷る

■王羲之・蘭亭序（東晋三五三年頃）の臨書（23）

象雲臨

【情随事遷】

今月の四文字は「感情は物事の対象に随って移ろう」という意味です。原帖では最初の「情」は行末にある字でやや扁平なのに対して、「随」は行頭の字で「事・遷」とともに暢びやかな結体です。書作において布置章法の大切さがよく言われますが、結体や余白の取り方は前後左右の文字や、紙面の空間に随って移るうものです。したがって作品の布置章法は画一的に押し量れるものではなく、作品の詩句・書体・字数・形式など様々な要因によって変化します。この「臨書の基礎講座」の拙臨は、主に古典の形に主眼を置いて習ういわゆる形臨のため、半紙に四文字を臨書する場合の布置章法を考えた場合には、「情」はやや違和感があるようです。「情・随・事」は異なる結体で本文中ほかにも見ることができまますので参考にしてください。